ＩＳ／Ｌ〈インフィニット・ストラトス／リリウム〉

サイコロＫ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ／Ｌ〈インフィニット・ストラトス／リリウム〉

【Ｎコード】

Ｎ５５１０Ｒ

【作者名】

サイコロＫ

【あらすじ】

リリウム＝百合。変態オリ主（女）晃村凛々が原作に介入していく話。オリ主≠最強、≠転生なのであしからず。

主人公設定（前書き）

順次追加予定

主人公設定

◇晃村凛々

ＩＳ学園一年一組所属。専用機持ち。
ＩＳ適性はＢ＋。本質的には操縦者というよりも技術者。
日本先進技術開発局で自分の研究室を与えられている。
中学には通わず、ＩＳの研究をしていた。
篠ノ之束には劣るものの、間違いなく天才。
技能『分散処理（マルチタスク）』を所持。

性格は変態。以上。
基本の性格はドＳで計算高い。ただ、プレイとしてならＭでも可。
常識に疎く、自身の性癖は問題ないと思っているが、毒舌は隠している。

容姿は整っているが、身長は低めで胸も薄い。しかしあまり気にしていない。
髪型は『とある魔術の禁書目録』の御坂美琴と同じ。ただし、ヘアピンなし。
髪の色は藍色。眼は茶色。

とある過去の出来事（本編でやる予定）から、今は義理の両親（母親が二人）と暮らしている。
ちなみに、彼女の性癖は両親の影響。

◇打鉄・改

凛々が日本政府から預けられているＩＳ。
打鉄をベースにしているが、原型を留めていない。製作者は晃村凛々。
名称は仮のモノである。
分類上は第三世代だが、他とはアプローチの仕方が異なるらしい。
他、詳細不明。

◇サイレントハウル（無音の咆吼）

特殊レールガン。全長２．８メートル。
発射時の音と光を限界まで抑えながら、特殊合金製の五十口径弾を初速５ｋｍ／ｓで撃ち出す。
威力は極めて高いが、精密機械の塊であるため本体の強度は低い。
加えて、発射前に三十秒のチャージが必要。
発射時に発生したプラズマを内部に閉じ込める構造のため、熱が篭もりやすい。一度撃つと一分近い冷却が必要となる。
銃身は非常に長いが、銃口付近０．３メートルは発射時の閃光を隠すカバーである。弾丸を加速させるレールは２．５メートル付近までしかない。

クラスメイトに異物混入（前書き）

凛々さんに品性とか常識は期待しないであげてください。

クラスメイトに異物混入

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

そう言って微笑む副担任の山田真耶先生。

私と同じ高校生と言っても通じる外見に黒縁眼鏡がアクセントとなっており、なかなかに魅力的だ。なんかこう、イジメたくなる的な意味で。

それはさておき視界に広がる女子、女子、女子！　これを楽園と呼ばずに何と呼ぶ！？

これから花開く“百合色”の学園生活に思いを馳せる。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

どうしたんだろう？　誰も返事をしない。

そういえば、教室に入って来た時から一種異様な雰囲気に満ちていた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

まあいい。今日はＩＳ学園の入学式。記念すべき出会いの日だ。

この自己紹介でクラス全員の顔と性格を把握する。私が得意とするのは情報戦だ。

運も私に味方しているらしい。真ん中の最後列という席からはクラス全体がよく見える。

そして、自己紹介があ行の終わりまで来た時だった。

「ええと、次は……お、織斑くん」

……は？　今、山田先生は何と言った？

「織斑くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

返事は男の声だった。どうやら聞き間違いではないらしい。

席から身を乗り出して前を見る。ソレは私の真ん前、最前列にいた。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

キョドる山田先生はなかなかに可愛らしい。溢れるパッションが抑えきれなくなるほどに。

少なくとも、そんな山田先生を見られたことには感謝するべきだろう。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよ！」

妙な雰囲気の理由はわかった。女だけ“だった”ＩＳ学園に男が

いるからだ。
史上初の男のＩＳ操縦者なんて、大々的なニュースだろうに。知らなかったのは私だけのようだ。
『打鉄・改』の最終調整で研究室に籠もっていたのがアダとなった。
とにかく、ヤツが私のハーレム建設の最大の障害となるのは間違いないだろう。織斑一夏……コロす。
そう決意していると織斑はこちらに振り向く。
「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
そして、数秒の沈黙。ん？　これはひょっとして事故ったのか？
神様ありがとう……！
でも、織斑ってどこかで聞いた名字だな。
「以上です」
よし！　自己紹介ならぬ事故紹介確定。
ついでに、それを聞いてずっこけた前の席の子の下着が見えた。
ここは天国ですか？
「あ、あのー……」
先ほどよりも、狼狽している山田先生。ヤバい。可愛い。
と、教室の前の扉から黒スーツの女性が入ってきた。担任だろうが……あれ？　どこかで見たことがあるような？
担任の女性は織斑の後ろに歩み寄ると、持っていた出席簿を振り下ろした。
「いっ――！？」

ああ。あれは痛いだろうな。同情はしないが。

「げえっ、関羽！？」

いや、違うだろ。こんな美人と髭武人を間違えるなど、失礼すぎる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

案の定、出席簿が再び織斑を叩く。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

そう言って、はにかむ山田先生。可愛い過ぎる。

……しかし、織斑先生？　それはつまり、あの織斑千冬様ということか。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にそだてるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

そして、教室には黄色い声援が響いた。もちろん、私の声も含まれている。

「キャーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
「千冬お姉様、犯してください！」

「……今年はいつもより酷いな。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているとしか思えん」

……なるほど。タチではないと。じゃあ、ネコなんだろうか？

「私、頑張って千冬お姉様を犯します！」

無言で千冬様が歩み寄って来た。これはＯＫということなのだろうか？

「にゃっ！」

出席簿がぶち当たった。そのまま戻っていく千冬様。

「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」

はっ！　これは折檻&放置プレイ！？　……いいかも。

「いや、千冬姉、俺は――」

三度、織斑を出席簿が襲う。あんなのを二回も食らっておいて学習しないあたり、バカなのか。

「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」
しかし、このやりとりから察すると、千冬様と織斑一夏は姉弟ということになる。
「え……？　織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して……」
「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」
「ノロイコロス」
私の声が聞こえたのか織斑一夏が頬をヒクつかせた。
ドン引きしてるな。まあ、男に嫌われるのなんかどうでもいい。

◇

「次、晃村。自己紹介しろ」
私の番が回ってきた。しかし、千冬様に名前を呼んでもらえるとは……光栄至極！
「晃村凛々（こうむらりり）です。男には興味ありません。可愛い、もしくは綺麗な女の子は私のところに来るように。以上」
クラス全員がずっこけた。何故だ？
しかし、一人だけ踏ん張っている千冬様。流石です……！

クラスメイトに異物混入（後書き）

次回はセシリアとの口論まで……書けると、いいなぁ

これでも私は推薦入学（前書き）

凛々さんがどんどん引き返せなくなっていくね、マジで。
感想待ってます。ついでに、良いタグ提供してください。お願いします。

これでも私は推薦入学

「嬉しいような、悲しいような……」

一時間目の授業が終わった後の休み時間。一年一組の前の廊下は詰めかけた生徒でごった返していた。

理由は一つ。この私……ではなく織斑一夏だ。

女の子に囲まれているのは至福だが、その理由が欠片も嬉しくない。むしろ恨めしい。

そういえば、さっきクラスメイトの一人が話しかけてきたのだが……。

◇

『晃村さん、さっきの自己紹介面白かったよー。掴みは完璧ってかんじ？』

『え？　面白かったって何が？　そんなことより、あなたなかなか可愛いわね。やらないか？』

『……え？』

何をやるかって？　もちろんナニに決まっている。

直後に彼女は表情を凍らせ、こちらを向いたまま後退していった。どうしたんだろう？

◇

以上、回想終わり。何が問題だったのか自問自答するも答えが出

ない。
まあいい。少なくともまだ誰も織斑とは話せていない。私もヤツも未だスタートライン上だ。
そう思っていたら、クラスメイトの篠ノ之箒さんが織斑に話しかけた。
篠ノ之さんはクラスでも五指に入る上玉。その篠ノ之さんに話しかけられるとは、織斑一夏侮るべからず。
しかし、篠ノ之ということは篠ノ之束の身内か？
千冬様と篠ノ之束は親友だという話だし、顔見知りのようなのでほぼ確定だろう。
あ。廊下に出て行く。追いかけなければ！
しかし、人の壁が邪魔で進めない。これではフラグブレイクができないじゃないか！
でも、今肘が誰かの胸に当たった。脚が誰かの脚と絡んだ。誰かの息が耳にかかった。

「うふふ……」

脳内は絶賛お花畑であり、最早当初の目的を忘れていた。でも、私は今幸せです。
パァンッ！

「何を廊下で惚けている、晃村」

はっ！？　いつの間にか休み時間が終わっている？
いや、そんなことより大事なことがある。

「もっと打って、千冬様ぁ。打たれるだけで絶頂できるように私を調教してください！」

「……聞かなかったことにしてやる」

ああ！　また放置プレイですか、千冬様！？

◇

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

山田先生が教科書を読んでいるが……退屈だ。

教科書に書かれていることなんて五年以上前に理解し終えてる。

ＩＳ学園に入学したのは実技の習得と『打鉄・改』の運用試験のためだし。

肝心の山田先生も落ち着いていたら魅力半減だ。ドジをしないドジっ娘なんて認めない！

ん？　織斑と隣の女子が何か話している。死ねばいいのに。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

それに気づいた山田先生が訊いてきた。死ね！　織斑ぁ、死ねぇー！

「あ、えっと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

よし。オチは読めた。故に脳内ＨＤＤに録画準備を促す。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

来るぞ。決定的瞬間ってやつが。

「ほとんど全部わかりません」

「ぷっ！」

予測通りでも噴き出しそうになった。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困惑に染まる。イイっ！

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

「……」

当然、いない。いるはすがない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

もちろん私は読んでいない。簡単すぎて読む気が起きなかった。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

織斑千冬の攻撃、『出席簿アタック』が織斑一夏にヒット。効果

は抜群だ！

「ぷふーーッ！」

まずい。我慢できずに噴き出してしまった。

「晃村、お前も机の上に何も出さずに何をしている？」

あ。まずい。ばれてた。

「あ、え、ええと……」

パァンッ！

言い訳をする前に出席簿を食らった

「もう。千冬様ったら公衆の面前で折檻なんて……激しすぎます！でも千冬様が望むなら露出プレイもドンと来いです！」

バガンッ！！

気絶させられました。

◇

「……はッ！？　ここは誰？　私は何処？」

今は休み時間のようだ。……周りの女子がずっこけている。パンチラ万歳。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

あれ？　セシリア・オルコットさんが織斑に声をかけている。
確か、イギリスの代表候補生で、自己紹介の内容から察するに高飛車お嬢様系のハズだ。
ＩＳ学園は多国籍なので外国の娘も多い。
多国籍ハーレムか。いいな。その折には是非イギリス代表としてオルコットさんも迎え入れたい！
という訳で混ざってこよう。

「訊いてます？　お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

ああ、着くまでに会話が進んでいく。フラグだけは立つなよ。

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……」

険悪な雰囲気。上出来だな。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「ねえ、私も混ぜてよ」

ふう。間に合った。

「ん？　確か……晃村だっけ？」

合ってるけど、男に名前を覚えられても嬉しくない。
しかも、オルコットさんの名前は覚えてないのに私の名前覚えてるとか嫌な予感しかしないな。
私は普通に自己紹介しただけなのに……。

「晃村さんはともかく、わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

プンスカしてるオルコットさんも可愛いなあ。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

また、周りの女子がずっこけた。今回は見えなかった。残念だ……。

「ねえ、織斑くん。イギリス代表の意味わかるよね？」

わからなかったら脳細胞が死滅しているとしか思えない。それでなくとも半滅ぐらいはしてるだろうが。
断じて千冬様の出席簿アタックのせいではない。その証拠に私は叩かれる度に脳細胞が活性化しているのを感じている。

「ああ。それなら」

「じゃあ、そこに候補生を付けてみて」
オルコットさんは小学校の授業のようなこの光景について行けないのかこめかみを押さえている。
「なるほど。晃村、お前の説明ってわかりやすいな」
感謝するな。気持ち悪い。
「ま、候補生って言っても狭き門。エリートだね」
「そう！　エリートなのですわ！」
おお、復活した。存外単純な性格なのかも。
「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」
確かに奇跡は言い過ぎだろう。確か四組にもう一人いたはずだ。対戦相手となりうる代表候補生のことだけは事前に調べていたのだ。
千冬様がいると知っていたら、もっとイロイロ準備したのに。
「そうか。それはラッキーだ」
「……馬鹿にしていますの？　大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でＩＳを操縦できると聞いてました、少しくらい知的さを感じさせるかと思って

いましたけど、期待はずれですわね」
「俺に何かを期待されても困るんだが」
――はっ！？　妄想に耽っていたら、会話が進んでる？
「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」
ない。そんな必要、断じてない。
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
「へー。入試ってそんなことするんだ」
「何を言ってるんですの。あなたも受けたでしょう？」
「いや、私入試免除だから。でも面白そうだな、受けとけば良かった」
オルコットさんが口をパクパクさせているが……あまり萌えないな。
「それなら、俺も倒したぞ、教官」
「い、一体どうなっていますの？　教官を倒したのはわたくしだけだと聞きましたが？　それに入試免除なんて聞いたことがありませんわ！」

「まあまあ。落ち着いてよ、オルコットさん」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キーンコーンカーンコーン。

三時間目開始のチャイムだ。

「っ……！　またあとで来ますわ！　二人とも逃げないことね！　よくって！？」

あれ？　何か違うフラグ立ってない？

◇

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

この授業はちゃんと聴かねば。千冬様の授業というのもあるが、知識はあっても経験が足りていないのが私だからだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表か。試合の回数は多いに越したことはないし、良い所を見せれば私に惚れる娘もいるはずだ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今

の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

なるほど。出会いの機会も増えると。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

出遅れたかな？　まあいいや。

「晃村凛々、立候補します！」

「候補者は織斑と晃村……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「ちょ、ちょっと待った！　晃村がやるって言ってるんだから、俺は――」

ライバルが自己消滅しようとしている。やったね！

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

チッ。消えなかったか……。

「い、いやでも――」

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのはオルコットさんだ。

完全に違うフラグが立ったね、これは。

「そのような選出は認められません！　実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。わざわざ、わたくしがこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのですから！」

まあ、ＩＳの本場は日本なんだけどね。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

一気にまくし立てるオルコットさん。

いくら私が女性には優しいとはいえ、プライドが無い訳じゃない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

……さすがにここまで言われては黙っていられない。

「ちょっと、オルコットさ――」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

お前、脳細胞が死滅してるだろ。織斑……。

「なっ……！？」

オルコットさん顔を真っ赤にして怒ってるし。

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？

決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「わー。何たるカオス。千冬様、どうするんですか？」

「どうするも何も実力で決めれば良いだろう」

いつからこの世界は力が支配するようになったのだろうか？　もちろん、最初からだが。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

奴隷か……。それはそれで魅力的だな。

だけど、夢はハーレム。最初から妥協する訳にはいかない。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

何か二人で盛り上がってるな。私のこと忘れてない？

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

その瞬間、爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気でいってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

私は言葉も出なかった。織斑一夏、こいつは本物の馬鹿だ。

「……じゃあ、ハンデはいい」

さすがに気づいたか。

「ええ、そうでしょうそうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

いやジョークにしてもイマイチだと思う。

「じゃあ、こうしない？　まず私とオルコットさんが勝負して、勝ったほうが織斑くんと勝負する。これならいいんじゃない？」

「わたくしはかまいませんわ。結果は変わりませんもの」

「俺は――」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、晃村はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑が何か言いかけたが、手を打って注目を集めた千冬様が話を纏めた。

さあ、『打鉄・改』の初舞台が決まった。せいぜい派手に行かせてもらおう。

これでも私は推薦入学（後書き）

戦闘パートが遠い。

ロンリー・ルーム（前書き）

やっと「クラスメイトは全員女」の部分が終了。
戦闘パートが近づいてきた……！
設定、更新しました。

ロンリー・ルーム

「どうしてこうなった？」

それがその光景を見た私の第一声だった。

話は放課後、授業が終わった直後までさかのぼる。

◇

「うう……」

何か織斑が唸っている。多分、授業が理解できなかったのだろう。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

やはりか。しかし、ＩＳとは世界の最先端技術の塊なのだ。難しくて当然だ。

もちろん、私は敵に塩を送ったりしない。遅効性の毒を混入した物なら送るが。

というか今日一日の織斑を見ていると、今すぐ口に猛毒を放り込みたくなる。

まあいい。今日は《サイレントハウル》の試射をしなければ。

「確か、第五アリーナが空いてたはず」

見ていろ、織斑。一週間後、無様に地面に叩き落としてやる。

二度と恋愛フラグを立てられないようにな……！

◇

三十分後、私は寮の廊下を歩いていた。

「弾速も消音性も十分だけど、ちょっと反動がキツいかな」

試射は五発分で終わった。《サイレントハウル》は想定通りの性能を発揮してくれた。

私が作ったのだから、当然と言えば当然だが。

……ん？　何か人だかりが出来ている。

見たところ１０２５室の前だ。ちなみに、私の部屋は１０２９室だ。

「どうしたの？」

「あ。晃村さん！？」

何故、私から距離をとる？

しかし、けしからん格好だね、君たち。胸元もパンツも見えてるし。……じゅるり。

「こ、ここ織斑くんの部屋――」

「わあ……篠ノ之さん、大たーん」

今、何と仰いましたで御座いますですか？

「抜け駆けしちゃダメだよー」

「織斑くん総受けって言うのも良いわね……」

急いでドアの隙間に潜り込む。こういう時、小柄なのは便利だと思う。

「どうしてこうなった？」

こうして、話は冒頭に戻る。

部屋の中では篠ノ之さんが織斑を押し倒していた。手には木刀があるが、そんなことはどうでもいい。

「なっ、ななっ……！？」

私たちに気づいた篠ノ之さんが織斑から離れる。

「あれー？　終わっちゃったー」

「いい感じだったのにねー」

「……もげろ」

はっ！？　つい本音が出た。

「……！」

篠ノ之さんが無言で近付いて来て、締め出された。その後にかちゃり、と鍵をかけられる。

「……ねえ。これはどういうコトなのかな？　説明してくれない？」

周りにいたクラスメイトを捕まえて問いかける。

そういえばこの娘、一時間目後の休み時間に話しかけてきた娘だ。

「ヒィッ！」

まるで化け物でも見たような反応、どうしたんだろう？
……ああ。きっと殺気を出しているからだ。
彼女には悪いが、今の私は織斑への殺意を抑えることができない。
ここは我慢してもらおう。

「え、えっと……お、織斑くんと篠ノ之さんは同室みたいだよ」

同室？　それはどういう意味だっただろうか？
少なくとも、同じ部屋に住むという意味ではないはずだ。何故なら、一五才の男女を同居させるなど有り得ないからだ。

「じゃ、じゃあ私行くね」

クラスメイトの娘が離れていくが、今の私には気づく余裕が無かった。
うん、思考終了。結論――さっきのはきっと白昼夢か何かだったのだろう。
そんなことよりも、私のルームメイトとのフラグを立てなければ……！　私は自分の部屋に向かった。

◇

「……」

私は自室に“一人”でいた。
誰も来ない。
二人部屋なのに誰も来ない。
一時間が過ぎても誰も来ない。
恥ずかしがっているのかと思い、部屋の前を見ても誰もいない。

隠れているのかと思い、部屋の中を部分展開したＩＳのハイパーセンサーで走査するも反応はない。
さすがに孤独に耐えかねたので、私はある場所に向かった。

◇

「千冬様ぁ！　私の同居人はどうしたんですか！？」

やって来たのは職員室。当然、千冬様がここにいるのはわかっていた。
千冬様なら半径一キロメートル以内にいれば探知する自信がある。他の娘は三百メートルが限界だが。
その千冬様は私に出席簿を振り下ろそうとして……やめた。焦らしてるんですか！？

「……晃村、織斑先生と呼べ。馬鹿者」

「わかりました。教師と生徒じゃ禁断の恋ですよね。二人きりの時だけにします」

千冬様、何でそんなに疲れた顔をしてるんですか？　似合いませんよ。

「……で、同居人の件か？　どうしたも何もお前は一人部屋だぞ」

……え？

「どうしてですか！？　ベッドは二つあるのに？　むしろ二人でベッド一つが理想ですけど！」

「今日、無理矢理変更したからな。お前と他の女子を同室にするのは危険だと判断した」

犯人は千冬様！？　まさか理由は嫉妬！？

……どうして嫌そうな顔してるんですか千冬様？

「本来ならば、篠ノ之がルームメイトになる筈だったのだがな」

……ということは、アレは白昼夢ではなかった、と。

「そんな！　篠ノ之さんが可哀想です！！　あんな野獣と一緒なんて！？」

織斑に襲われ、無理矢理に純潔を奪われる篠ノ之さん。……何か興奮してきた。

「晃村、鏡を見ろ。鏡を」

言われたので、ポケットから手鏡を取り出し、見る。

いつも通り、自分の顔が映っているだけだ。

「見ましたけど、どうしたんですか？」

「……いや、いい」

「織斑先生、どうして遠い目をしてるんですか？」

まるで何かを諦めたような目だ。一体、何が千冬様にそんな目をさせているのだろう？

たとえ、どんなモノでも千冬様の顔を曇らせるなら許さない！

「とにかく、姉の私が言うのも何だが……織斑に篠ノ之を襲う度胸など無い」

なんて意気地のない……！　私なら速攻襲うのに。

「でも、絶対に有り得ない訳じゃないですよね？」

「それはそうだが――」

「いいですか？　織斑くんと篠ノ之さんだと不純異性交遊です。でも私と篠ノ之さんなら不純同性交遊。極めて健全です！」

バシン！

「不純を冠する行為が健全な筈があるか！　馬鹿者！」

出席簿で叩かれて、職員室から放り出された。

私の論理展開は完璧だったはずなのに、何故だ！？

ロンリー・ルーム（後書き）

次は多分、明日ぁー。

オン・ユア・マーク（前書き）

更新遅れた……。すみません。
なんか最近忙しいんだ！
ちなみに、セシリアとの対決は次回です。

オン・ユア・マーク

ぐぅーー。

またお腹が鳴った。それに気づいた女子がこちらを覗き見てクスクス笑っている。

恥ずかしいけど、羞恥プレイみたいでいいね！

今は三時間目、山田先生がＩＳの基本知識を教えている。

ちなみに、昨日の夜はウキウキしながら大浴場に行ったのだが、待ち構えていた千冬様にシャットアウトされた……。

部屋に戻って、悲しみにむせび泣いていたら寝坊した。故に朝食は採っていない。

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

まあ、実際いじってるんだよね。悪いようにはされないので大丈夫だけど。

ただ、それが倫理的に正しいのか？　そう問われると頷きかねる。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです」

あのー、山田先生？　私はブラジャー着けてないんですが。不必要的な意味で。

「もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないないと、形崩れしてしまいますが――」

途中で山田先生の説明が止まる。

何事かと見てみると織斑と見つめ合っていた。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君はしていませんよね。わ、わからないですね、この例え。あは、あはははは……」

いや、男でも大体わかると思う。ブラジャー未経験の私でもわかるし。

しかし他の娘たちが胸を隠して織斑を意識している！？

このままではマズい。恋愛フラグが立ちかねない！

「ところで！　山田先生の立派なモノは何カップですか！？」

「ふ、ふぇぇっ？」

よし！　これで雰囲気はぶち壊し。ついでに山田先生の恥ずかしがる顔も見られて一石二鳥だ。

「いい加減にしろ！」

バシンッ！

「うにゃっ！？」

頭に走る衝撃。同時にこみ上げる恍惚感。

「もう、織斑先生。こういうのは二人きりの時に――」

「晃村、この授業中ずっとグラウンドを走りたいか？」

「……大人しくしてます」

この天国を追い出され、一人きりでグラウンドを走り続ける。寂しすぎる……。

「んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

千冬様の咳払いで凍っていた時間が再び動き出す。

「そ、それともう一つ大事なことは、ＩＳにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話――つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、ＩＳ側も操縦者の特性を理解しようとします」

これが専用機持ちが強い理由の一つだ。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

右手の人差し指を見る。そこには銀色の指輪、待機状態の『打鉄・改』が嵌められている。

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」
女子生徒の一人が手を挙げて質問した。
だが、彼氏彼女のような関係？　ＩＳが彼氏なら嫌なんだが……。
「そっ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」
よし！　山田先生は穢されていないようだな。……うふふ。
当然、私には男性経験などない。お母さん“たち”に混じっての女性経験ならあるが。
ん？　山田先生が織斑に熱い視線を送っている！？　織斑もげろ！！
「な、なんですか？　山田先生」
「あっ、い、いえっ。何でもないですよ」
嘘だっ！
確かに織斑は強敵だ。だが過程は関係ない、最後に結ばれさえすれば！
キーンコーンカーンコーン。
「あっ。えっと、次の時間では空中におけるＩＳの基本制動をやりますからね」
最初の一週間は座学オンリーらしい。退屈だが『打鉄・改』を秘匿するには好都合だから善しとしよう。

◇

四時間目、私は憂鬱の極致にいた。

「……はぁ」

その原因は休み時間の出来事にあった。

織斑の所に集まる女子、対照的に過疎化する私の周り。

――回想終了。……ふふふフフ。必ず叩き落としてヤる。

そういえば、織斑にも専用機が与えられるらしい。

予想通りだが、ひょっとすると篠ノ之束製か？　千冬様、ブラコン入ってる気がするし、依頼したかもしれない。

まあ、織斑はＩＳに関しては素人。専用機持ち相手なら惨敗確定だから問題ない。むしろ落差を大きくしたと言えるだろう。

それから、篠ノ之さんが篠ノ之束の妹であると正式に確定した。

姉妹仲は良くないようだが、篠ノ之束のあの性格では仕方ないだろう。

ん？　オルコットさんが私を見てる？　近寄って来たし。

「晃村さん。少し付き合ってもらえます？」

『付き合って？』……これは愛の告白！？　私の思いが通じたのか？

「少し唐突な気もするけど、喜んで――」

「何を勘違いしていらっしゃるのか知りませんが、あっちですわ」

そう言って織斑を指差す。あー。そういうことか……。

私は席を立ってオルコットさんと共に織斑の席に向かった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

いや、多分織斑は自分がどのＩＳで対戦するかなんて全く考えていなかったと思う。バカだし。

「まあ、私もオルコットさんも専用機持ちだしね」

「あら、晃村さんも持っていたんですのね。というか、何故わたくしが専用機持ちだと？」

「そんなの少し調べればわかるよ。イギリスの第三世代試作機『ブルー・ティアーズ』だっけ」

本当は詳細なスペックや特殊武装の特性まで把握している。しかし、ハッキングで得た知識をひけらかすようなバカな真似はしない。

「へー。お前ら意外とすげーんだな」

『意外と』ってどういう意味だ。しかも、言いながら私の方見たし。

「まあ、わたくしは代表候補生だから当然として。晃村さんは何故専用機を？」

「ん？　私は自分で作ったＩＳの運用試験してるだけだよ」

二人とも何で驚いた顔してんの？

「つ、作ったって晃村、お前何歳だよ！？」

「酷いなあ。いくら発育がイマイチでも、みんなと同じ十五歳だよ」

去年、小学生に間違えられたのは嫌な思い出だ。

「ま、まあ所詮は第二世代でしょうけど？」

確かに日本のＩＳ開発は第二世代で止まって“いた”。

何をトチ狂ったのか倉持技研が第四世代機の開発に挑戦して盛大にポシャったのは記憶に新しい。

「いや、第三世代の実証機だよ。……そうだ。名刺渡しとくね」

取り出した名刺には『日本先進技術開発局・晃村研究室・室長・晃村凛々』と印刷されている。

「「し、室長ーー！？」」

見事にハモるオルコットさんと織斑。仲悪いんじゃなかったっけ？

「室長って言っても私一人だけの研究室なんだけどね」

こんな小娘の下で働きたい人間などいないだろうし。

「でもそれって一人だけで第三世代ＩＳを作ったということじゃありませんの？」

「そうだけど。それがどうかしたの？」

少なくとも、ＩＳ専門なら篠ノ之束に遠く及ばないし。

「やっぱり、天才ってのは何かズレてるんだな、箒」

そう言って篠ノ之さんに話を振る織斑。直後、鋭く睨まれてたじろいでいたが。

ところで、私のどこがズレてるのだろうか？　至ってノーマルのハズなんだが。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

篠ノ之さんの殺人光線がオルコットさんに移る。

「妹というだけだ」

オルコットさん怯んでるし。かくいう私も少しビビってる。

世界眼力選手権があったら優勝候補になれるだろう。まあ、優勝するのは千冬様だが。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

自分の席に戻って行くオルコットさん。

――って、私置いてかれてる？

「ええと、晃村はまだ何か俺に用があるのか？」

「いや、ないよ。けど一つだけ言っとこうかな、――素人が簡単に勝てるほどＩＳは甘くないよ」

笑顔っていうのは本来攻撃的なモノらしい。
ならば、今私が笑みを浮かべているのは自然なことなのだろう。
神妙な面もちになった織斑を尻目に、私も席に帰った。

◇

そして、翌週の月曜。対決の時は来た。
一回戦。イギリス代表候補生：セシリア・オルコット『ブルー・ティアーズ』ＶＳ日本先進技術開発局所属：晃村凛々『打鉄・改』。

オン・ユア・マーク（後書き）

さて、次はいよいよ戦闘パートです。
実を言うと、自分ＩＳに特に詳しくないです。※アニメと5巻まで流し読み。読み直しながら書いてます。
ですので、おかしな所があったらご指摘ください。

ゲット・セット・ゴー（前書き）

あーー……。今の生活嫌だー。
はい。愚痴です。聞き流してください。

多分、次は短め。設定の更新は次話の投稿時で。

ゲット・セット・ゴー

セシリアは待っていた。自分の対戦相手が出てくるのを。

「ふん」

――戦闘状態のＩＳを感知、接近中。操縦者晃村凛々。ＩＳネーム『打鉄・改』。戦闘タイプ不明。特殊装備不明――。

ハイパーセンサーから送られてくる敵ＩＳの情報を流し見る。

公式の試合に出るのが初めてらしく、情報には不明な点が多い。

「――来ましたわね」

ゲートから打鉄・改を展開した晃村さんが出てくる。

その外見を見て、セシリアはほくそ笑んだ。

なるほど、打鉄・改という名前も納得だ。外見は『打鉄』とほとんど変わらない。

違いと言えば、肩と腰の装甲が肥大化しており手足が一回り太いこと。背中に大きな膨らみがあることぐらい。

ある意味、ガード型の打鉄をより防御に特化させた機体といえるだろう。

故に、こう判断した。第二世代に毛が生えた程度なのだろう、と。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「逃げる理由なんてないからね」

そう言いながら武装――検索、四五口径サブマシンガン《Ｍ９９サーペント》と一致――を両手に展開する。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスねえ……」

「晃村さんも惨めな姿を晒したくはないでしょう。今ここで辞退するならそれで許してあげますわ」

そう言いながら、左目とＦＣＳをリンクさせ《スターライトｍｋ？》のセーフティを解除する。

「惨めな姿を晒すのはそっちだよ。オルコットさん」

――警戒、敵ＩＳがセーフティのロックを解除――

「そう？　勘違いしているみたいですわね。それなら――」

《スターライトｍｋ？》を構え、エネルギーを装填。トリガーに指をかける。

「お別れですわね！」

キュインッ！　独特の高音とともに青白い閃光が撃ち出される。

「――ッ！！　危ないなあ、もう！」

だがそれが予定した目標に命中することはなかった。

肩の非固定浮遊部位の装甲が移動、射線に割り込んできたためだ。

しかし気にせず、セシリアは続けて数射叩き込む。

「遅いですけど、バカみたいに堅いですわね！」

晃村さんは回避機動をとっているが、その動きは非常に遅い。

その代わり、肩部装甲は恐ろしいほど堅い。セシリアの武装では貫通は難しいだろう。

「わあッ！？　怖い怖い」

晃村さんはそう言いながら撃ち返してくる。

肝心の攻撃はサブマシンガンの適性距離が短めなことから距離を取っていれば怖くない。

しかし、このままではこちらもジリ貧。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

ならば、敵の防御の処理限界を超えた攻撃を加えればいい。

背後の非固定浮遊部位に接続された《ブルー・ティアーズ》が飛んでいく。

これこそが『ブルー・ティアーズ』の真骨頂の一つ、四機の自立（ブルー・ティアーズ）攻撃端子だ。

さて、ここで問題だ。二枚の盾で四方向からの攻撃を防げるだろうか？

「……くッ！？」

答えは当然、否だ。

晃村さんは回避も防御も追いつかず、装甲を削られていく。それにしても、本体装甲も相当の硬さだ。

◇

「――十八分。そんな機体でよく頑張りましたわね。誉めて差し上げますわ」

「機体もあわせて私の評価だから、あんまり喜べないなあ」

シールドエネルギー残量３１７。表層実体ダメージ６７％。左側の肩部装甲が欠落。右側も限界が近い。

このままでは負けるだろう。このままでは。

「いえいえ。このブルー・ティアーズを前にして、割と耐えたほうですわよ」

まあ、オールレンジ攻撃は厄介だ。いくらハイパーセンサーにより全方位が知覚できても避けきれないし。

ただ、オルコットさんの場合自立攻撃端子の使用中は本体の動きが疎かになっているが。

「こうなるから辞退を勧めましたのに。やはり、惨めな姿を晒すのはあなただったみたいですわね」

――自立攻撃端子制御ソフト構築完了――。

「まだ終わってないんだから、油断しない方がいいんじゃない？」

――敵ＩＳの遠隔操作システム改竄完了――。

「今終わらせてさしあげますわ。さあ、閉幕（フィナーレ）と参りましょう！」

オルコットさんの命令に従い、四機の自立攻撃端子が私を取り囲む。
――敵自立攻撃端子をジャックします――。
制御ソフト構築と遠隔操作システムの改竄に使っていた思考を自立攻撃端子の制御に回す。
そして、自立攻撃端子はその銃口をオルコットさんに向けた。
「――は？」
次の瞬間、四機の自立攻撃端子が自らの飼い主に牙を剥いた。
吐き出されたレーザーは正確にオルコットさんを狙う。
「どうなってますの！？」
さすがに自分の武装だけあって特性を把握しているらしく、上手く回避している。
「わかんないの？　ハッキングしたんだよ、オルコットさん！」
自立攻撃端子に気を取られている隙に接近、両手のサブマシンガンのトリガーを引き絞る。
レーザーと四五口径弾の雨がブルー・ティアーズに降りそそいだ。

◇

「こ、これは一体？」
ピットでモニターを見ながら真耶は驚きを露わにしていた。
「山田先生には言ってなかったな。あいつのＩＳは電子戦仕様だ」

ＩＳ学園にある打鉄・改のデータを呼び出しながら千冬が告げる。
電子戦仕様。それなら理論上は可能かもしれない。
「しかし、戦闘とハッキング、ＢＴ兵器の制御ソフト構築を同時に行うなんて！？」
真耶が表示した打鉄・改の戦闘ログには膨大な量の情報が表示されていた。
こんなのＩＳのスペックが十分でも扱う人間が付いて行けない。
「あのー。それってそんなに大変なんですか？」
「大変などというレベルではない。お前は剣道の試合をしながら数学と国語の問題を解けるか？」
おずおずと挙手しながら訊いた一夏に千冬が答える。
「……無理です」
うなだれながらそう言った一夏に、千冬は「実際にはさらに複雑だがな」と付け加えてトドメをさす。
「でも晃村さんは一体どうやってそれだけの処理を……」
「それならこれを見ると良い」
千冬が新たに開いたモニターには『ナノマシンによる疑似神経系の形成と外部演算処理システムとの同期による分散処理について』と表示されていた。

「四年前の研究論文みたいですね。発表者は……晃村さん！？」

「多くの人間は当時十一歳の少女が書いた論文に見向きもしなかった。唯一、その有用性に気付いたのが日本先進技術開発局だそうだ」

日本政府から送られて来た情報を読み上げる千冬。

だが、千冬の中には一つ疑問がある。凛々のそれまでの経歴が普通過ぎるのだ。

資料では、政府管理の孤児院出身とある。小学校も孤児院併設の物で教育内容は一般と変わらない。

それが突然、十一歳であの論文を発表し、一二歳でＩＳの開発を始めている。不自然ではないだろうか。

だが、その疑念を一時保留とする。試合に変化があったからだ。

◇

自立攻撃端子（ブルー・ティアーズ）が落ちて行く。理由は簡単、『ブルー・ティアーズ』からのエネルギー供給をカットされた為だ。

制御は奪えてもエネルギー供給用のバイパスまでは構築できない。

オルコットさんも自立攻撃端子が発砲する度に自分のエネルギーが減るのに気付いたのだろう。

「オルコットさん、驚いた？　これが打鉄・改の第三世代兵器《鳩（は）朱鷺（とき）》だよ！」

打鉄・改の特殊装備は背中に搭載された演算処理システム《ＤＯＶＥ》と《ＩＢＩＳ》であり、それによって得られる電子戦能力こそが最大の武器だ。正確に言えば、イメージインターフェースも含めて一つの装備だが。

使用するにはナノマシンの注入が不可欠だが、分散処理とシステムの高速操作が可能となる。
ただ、欠点もある。思考を分散させればさせる程疲労の蓄積も加速するのだ。まあ、一週間ぐらいなら完徹もできるので私は平気だが。

「まさか、電子戦装備ですの！？　しかし、それだけの演算には相当の熱が発生するはずですわ」

オルコットさんは肩で息をしている。しかし、察しが良くて助かる。説明の手間が省けるし。

「熱の処理には私も苦労したよ。結局、熱は推力に変換することになったしね」

「推力に変換……っ！？」

気付いたようだがもう遅い。今まで熱を変換、蓄積し続けていたエネルギーを解放する。
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』、強烈なGを受けながらもオルコットさんに接近する。
オルコットさんは離脱しようとしているが、ブルー・ティアーズのスラスターが動かない、動くはずがない。
スラスターの役割を果たす非固定浮遊部位もさっきジャックした。

◇

ISの制御システムは大きく二つに分けられる。腕部・脚部アーマーなどの人体の延長線上用のモノとそれ以外――非固定浮遊部位などの制御用のモノだ。

前者はハッキングしやすいが侵入に気付かれやすく、復旧も早い。
後者はハッキングに時間がかかるがバレにくく、戦闘中の復旧はまず無理だ。
また、外部との交信を完全に遮断されれば、当然ハッキングなど無理だ。
そういう意味では本体と交信し続ける必要がある非固定浮遊部位は狙い目といえる。まあ、非常用のコードで有線制御にされると無理だが。

◇

「これで終わりだね！」

《サーペント》が火を噴き、ブルー・ティアーズを削る。
近距離での全弾発射だ。甲高い着弾音とは裏腹に一気に半分近くのシールドエネルギーを持っていく。

「くぅッ……！」

オルコットさんが呻くと同時に両方の《サーペント》の弾倉が空になる。

「……あれ？」

慌てて次の弾倉を呼び出すが、一瞬射撃が止んだ。それを見逃す程オルコットさんも甘くはなかった。

「まだですわ！」

ブルー・ティアーズ腰部のスカート状アーマーが展開。ミサイル

を撃ち出した。
ドカァァァンッ！！
圧倒的な爆炎に私の視界は真っ白になった。

◇

セシリアの至近、安全領域ギリギリでミサイル型が打鉄（ブルー・ティアーズ）・改に命中。
黒煙から打鉄・改の装甲片がバラバラと落ちていく。
セシリアは注意深く構えていた。しかし、数秒後に黒煙が晴れた時、そこには何も無かった。
アリーナ中をハイパーセンサーで索敵しても反応はない。
（……あら？　ひ、ひょっとしてわたくし殺ってしまいましたの！？）
それはマズい。非常にマズい。なんとか証拠を消さなければ……！
ガァァンッ！
狼狽えてキョロキョロしていたセシリアを衝撃が襲い、絶対防御が発動した。
ブザーと無感情な機械音声が試合の決着を告げた。
『試合終了。勝者――晃村凛々』

ゲット・セット・ゴー（後書き）

何が起こったのかは次話で解説したいと思います。

最後に、６・７巻手に入らねぇ……！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5510r/

ＩＳ／Ｌ〈インフィニット・ストラトス／リリウム〉

2011年4月29日14時32分発行